初級カウンセラーの訓練効果に関する実験的研究

江　口　昇　勇

問題と目的

現代社会の複雑性や人間疎外の状況は，心理的援助の需要を高めてきている。しかし，我国における心理治療者（以下カウンセラーと呼ぶ）の養成は欧米に比して著しく遅れているといわれている（上地　1977）。

心理療法におけるカウンセラーの役割が人間（クライエント）の深層心理・心理葛藤・自己探究の過程等々を扱うことから，その訓練は単に技術的なものにとどまることでは不充分であり，カウンセラーを志す人自身の内的成長を援助してゆくことが必須となってくるのである。

カウンセラーの訓練について，精神分析学では＜教育分析＞を重要なプログラムの一つに取り入れている。我国においては，従来は精神科医らによって医療モデルの中で具体化してきた歴史を持っている（小此木　1971）。一方，心理学の分野では，アンチ精神分析としてRogers（1957）が心理治療におけるカウンセラーの条件を3つに簡潔に取り出し，クライエントセンタードセラピーを発展させてきている。そして，この3条件をマスターするために様々の訓練技術，理論が提出されてきた（Rogers 1957, Patterson 1959, Gendlin 1962, Truax & Carkluff 1967）。

それらはテキストの講読，テープの拝聴，グループ体験等有効な方法が出されてきたが，各人が共通して強調するのは＜スーパービジョンを受ける経験＞である。これは，先の教育分析と同じ構造を持つものであるが，スーパービジョンの意味するものとして，(1)自ら，クライエントの立場になり，クライエントがカウンセラー（スーパーバイザー）をどのようにみるかを体験を通して理解し，(2)さらにスーパーバイザーに支えられて自己洞察を深め，自ら成長を遂げること　等が考えられる。ただしカウンセラーが社会的に位置づけられ，その教育とスーパービジョンが臨床心理学の一分科として注目を浴びている欧米の状況（Seligman & Baldwin 1972）とは異なり，我国ではスーパービジョンを受けることができた者は極めて稀である。

こうした状況を踏まえ，本研究では「臨床面接法実習」を受けた＜初級カウンセラー＞を対象に，実験的操作手続きを施してスーパービジョンの効果を明確化しようとするものである。こうした研究は，我国では，佐治・水島他（1963・1964）が山本・越智の治療関係スケールを用いて実験的になされている。米国においては，Rogers門下のTruax & Carkhuff(1967)がRogersの3条件をスケール化した測度を用いて，実証的に訓練の効果をあらわしてきている。筆者は本実験において，この3本のスケールを援用した。

又，心理治療という個性的・独自的な領域においては一人一人の主観的要素を無視できない所がある。数量的なとらえのみでは，治療的人間関係の本質的なものを見落すおそれがあると思われる。そこで，本研究では数量的なとらえとともに，各被験者の主観的な印象記録・自己内省を記述をできるだけ＜生＞の形でまとめる作業を行い，カウンセラーとクライエントの治療面接の場面を再構成して，そこでの両者の心の動き，やりとりを分析しつつ，それらをカウンセラーが訓練を通してどのようにとらえていったのか，その変容プロセスを追ってみようとした。

方　法

(1) 予備調査　本実験を実施するについて，本研究の性質上被験者に，カウンセリングについてのある程度の基礎知識と初歩の実技（ロールプレイ）を経験した者を選んだ。この条件をみたし実験に参加したのは学部生・研究生の15名であった。彼らに対して，学年・性別・家族構成・自宅か下宿か・カウンセリングへの動機づけ・内向・外向の性格検査（MPI・E尺度）を調査し，等質化した3群を実験的に作った。（カウンセラーロールの被験者）

次に，クライエントロールを取る被験者を，カウンセラーロールの被験者に付した条件を持った上に，さらに1年以上の臨床実践を持ち，カウンセリング研究会に所属している（又は所属していた）メンバーから5名を選んだ。（クライエントロールの被験者）

(2) 本実験の手続き　予備調査で等質化された3群（各群5名）に対して，5名のクライエントが各々2回の面接を実施するようにした。この際各クライエントに出会う各群のカウンセラーはできるだけ等質になるように組み合わせを行い，さらに，クライエントの主訴もカウンセラーにとって了解が容易なものから困難なものへと配列した。（ただし，1名のクライエントは同じ主訴で3群のカウンセラーに出会う）

各群の違いは，2回の面接における面接後訓練の内容である。即ち，実験群として，Ⅰ群では面接の全逐語録（自己訓練）を作成した上で，1時間のスーパービジョンを受ける（教育訓練）。Ⅰ群では面接の全逐語録を作成する（自己訓練のみ）。統制群としてⅢ群では面接のテープを少くとも3回以上メモをとりながら聴くというものである。

そして課題として，面接直後と訓練後に，Truax &

Carkhuff の3本のスケール（正確な共感：A・E・スケール，非占有的暖かさ：N・P・W. スケール，自己一致又は純粋さ：G・or S・C・スケール）とPoter のカウンセラーの態度分類の評定を各面接ごとに計4回実施するものである。又面接についての印象，クライエントのとらえ，自己内省を記述のレベルで行う。訓練の意味についても記述させた。一方，クライエントロールの被験者には，面接とカウンセラーについての体験目録による評定と自由記述及び3本のスケールと態度分類の評定をした。

(3)本実験の仮説の概要

a）A・E・，N・P・W・，G・or S・C・ 3本のスケールについて

カウンセラーの評定は、Ⅰ群では波型（∨∧）のグラフを描き，Ⅱ群はゆるい単調増加，Ⅲ群は急激な単調増加のグラフを描く。そして，初回評定値は3群に差がなく2回，3回，4回と次第に各群の差は増加するであろう。クライエントの評定は，3群に差はなく評定値はⅠ群の訓練後の値に近似するであろう。

b）カウンセラーの態度分類の評定について

カウンセラーの評定とクライエントの評定では，Ⅰ群の訓練後におけるものが一致度は他に比して最も高いであろう。

c）クライエントの体験目録による評定について

クライエントのカウンセリングとカランセラーについて体験目録による評定では3群に差はみられないであろう。

数量的には以上の仮説が考えられた。そして，記述レベルにおいては，上記の仮説を支持しさらに，これらの仮説の意味を具体的に内実化してゆくであろうと予想された。特にⅠ群においてその傾向は顕著なものと予想した。

結果と考察

(1) 数量的な結果

a）スケールに関する仮説について：カウンセラーの評定では①A Eスケールについて3群間の分散分析を実施し，1回目と3回目評定において（$P < 0.25$）3回目と4回目において（$P < 0.1$）有意差があり仮説を支持する結果となった。しかし，他のN.P.W.スケールとG or S・Cスケールにおいては，グラフでは傾向を示しつつも，統計的にはいづれも有意な差はみいだされなかった。一方クライエントの評定では，3本のスケールとともに，3群間に差はみられなく仮説を支持した。そしてクライエントとカウンセラーの評定の近似性についてはA.E.スケールで仮説を支持する結果を示したものの，他のスケールでは全体が一定値に偏在したためその傾向はみられなかった。 b）カウンセラーの態度分類に関する仮説について： 標本数が少なく，統計的検定は実施しなかったが，実数で示すと，Ⅰ群では訓練の前後で面接中の自分の態度を違ったように見た者が5名中4名いたのに対して，Ⅱ群では全員が変化させてなく，Ⅲ群でも4名が変化させないでいる。そして，クライエント評定の一致数についても，Ⅰ群が訓練後において最も高くなっており，一応仮説を支持する傾向を示した。

c）クライエントの体験目録に関する仮説について：クライエントは面接とカウンセラーについての印象では3群にほとんど差はなく，特に2回目面接の評定では各群の平均値がほぼ同値となるなど，仮説を支持した結果となっている。

(2) 数量的結果の考察 (1)で見てきた如く，N.P.W.とG or S・C・スケールを除いて，A.E.が仮説を支持する結果を得た。このことから次のように考察が可能と思われる。つまり，面接後において，スーパービジョンの訓練を受けた群は，自分の面接について面接直後よりも訓練後により厳しく評定しており，その値がクライエントの評定値に近似していることを思うと，面接におけるカウンセラーの「自己覚知（自己のあり様を正確に認知する）」がより適切であることを意味し，自己訓練群においては自己評定が訓練前後で変化がなく，「自己覚知」については，クライエントより少し高く評定しているのであるが，統制群では，訓練後において評定値を大幅に増大させており，クライエントの評定とは大きくかけ離れていて，「自己覚知」は全くできてなくて，自己の面接に甘くなっていることがよくあらわれている。

又，クライエントの評定は，3本のスケール，態度分類，体験目録とも，3群間に全く差を示していない。このことは，スーパービジョンが「自己覚知」を促進させる要因になっていることは示しつつも，それがそのままカウンセリングの技術そのものに結びついていかないものであることを暗示している。そのことは，クライエントロールをとった被験者の多くが，訓練の差より，カウンセラーが元来持っているパーソナリティーや対人関係における距離のおき方の方に，話しやすさ，伝わりやすさを感じると語っていることにも関係がありそうである。

(3) 面接記録の結果の考察（一部分のみ） 数量的な結果を具体的に内実化する面接記録の例を1箇所のみ抜粋する。スーパービジョン経験が「自己覚知」を促進させる要因についてある被験者は「自分のとったカウンセリングに対して，第三者の視点を導入することによって，視野が拡大し高い次元からより客観的に冷静にみつめるようになり，その結果，面接やクライエントを受容することが可能になった。」と述べている。

討 論

本研究の反省点として，(1)標本数が少なかった (2)測度として使用したスケールの適用妥当性に疑問が残った (3)仮説を説明するに足る理論的根拠が貧しかったこと等があげられる。今後の実験計画の課題として，(1)訓練方法にV・T・Rの導入やグループスーパービジョン導入 (2)面接回数を今回2回から5回さらに10回と拡げてゆくこと等により，多面的に進めてゆくことが必要と思われる。